

世界史

日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2月7日	I	4世紀から20世紀までの朝鮮半島の歴史	やや易
	II	中世ヨーロッパの都市、信仰、文化	標準
	III	19世紀後半から第二次世界大戦勃発までの欧米各国の歴史	やや易
2月8日	I	古代ローマ世界とその周辺地域の歴史	標準
	II	東西交易路の関係地域（東南アジア、アフリカ、ユーラシア）の歴史	やや難
	III	20世紀の中国の歴史	標準
2月9日	I	古代地中海周辺地域の歴史	標準
	II	絶対王政期のヨーロッパと市民革命	標準
	III	19世紀以降のロシアの歴史と社会主義の台頭	やや難

<出題傾向>

いずれの日程も、15問ずつの大問3題構成で、小問数は計45問、全問マーク式で共通している。設問形式は、語句選択問題と短文正誤問題が大部分を占めており、まれに地図・史料を用いた問題や、事項並べ替え問題も出題されている（各日程1～2問程度）。出題形式ごとの小問数は、問題ごとに幅があり、2月7日の問題I・IIのように語句選択問題が大部分を占める問題もあれば、2月8日の問題IIのように短文正誤問題が大部分を占めるものもある。いずれの問題も教科書学習で十分対応が可能な基礎的なものであるため、難易度は出題形式に左右される面が大きい。

出題内容については政治史が中心であるが、いずれの日程も各問題に1～2問程度文化史からの出題がある。東洋史・西洋史はバランスよく出題されており、なかでも、中国を中心とする東アジア史と、中世～近代ヨーロッパ史からの出題が多い。南アジア、東南アジア、アフリカ、イスラーム世界に関しても、多くはないが出題はみられる。ただし、今年度はラテンアメリカ世界に関する問題の出題はなかった（昨年度はイスラーム史やラテンアメリカ世界が中心となる問題が出題されている）。出題年代については、古代から戦後史までまんべんなく出題されているが、昨今の国際情勢に関するもののような時事問題の出題は、今年度はみられなかった。

総合的にみると、世界史の試験問題は、教科書学習で十分対応可能な基本事項を問う標準的な設問がほとんどであり、周辺地域を含めた幅広い地域における戦後史までを含む全年代について十分に学習しているかどうかを評価するものであるといえる。

<学習対策>

【学習の基本は教科書の精読】 すべて教科書に掲載のある情報から出題されているため、まずは使用している教科書の全範囲を精読することが重要である。世界史探究の教科書には、単元ごとの冒頭で、その単元で着目すべき歴史的事象に関する問いかけやポイントが記されている。この問いかけに対する答えを見つけることを念頭において教科書を読むと、内容が整理しやすく、記

憶にも定着しやすい。また、さまざまな年代・地域からまんべんなく出題されるため、最初からすべての内容を完璧に覚えようとするのではなく、まずは通読することを目標とするとよい。問題のうち、語句選択・語句組合せ選択問題の多くは教科書の太字の事項を覚えていれば対応可能であるが、まれに脚注に掲載されている情報など、やや細かい事項が問われることもあるため、一度通読を終えた後は、まず太字の項目を覚えることを目標とし、次に欄外の注にも目を通すようにして段階的に学習することを心がけよう。

【正誤問題は過去問研究でポイントをつかもう】 出題される正誤問題の多くは、基本事項をおさえていれば誤りのポイントを見つけることができるもので、決して難易度は高くない。しかし、正誤問題に慣れていないと、誤っている部分に気づかず、一見正しように見える文章を選択してしまったりする。対策として、過去問を多く解くことを強く勧める。数多くの正誤問題を解いていくことで、問われやすい事項や、誤りにされやすいポイントを見つける視点が養われる。教科書学習が重要であることはいうまでもないが、通史学習の合間に過去問をのぞいてみることを勧める。正誤問題は、通史学習のアウトプットとしての機能をもつだけではなく、インプットにも最適である。誤りのポイントに線を引いたり、正しく直した情報を書き込んだりしながら解く習慣をぜひ身につけてほしい。

【各地域の地理をおろそかにしない】 例年いずれかの日程で地図問題が出題されている。出題されるのはいずれも基礎的なものだが、地図問題に限らず、世界史学習には各地域の地理を把握しておくことが不可欠である。首都や主な戦場、商業の中心となった都市、港市などの名称はもちろんのこと、各単元の学習を始める際には主要な河川、山脈、半島、海などの名称と位置を把握しておこう。地図問題の対策としては、教科書に掲載されている地図を頭に入れておくだけでも十分であるが、ある程度通史学習が進んだ後は、資料集を使って世紀ごとの勢力図を比較学習することも情報の整理に有効である。東南アジア史やアフリカ史など、いわゆる周辺地域の学習は特に、その地域の地理を把握しておくことが学習の手助けになる。

【文化史は独立した学習に加えて政治史と関連づける習慣を】 いずれの日程も文化史の出題がみられる。教科書では単元ごとの文化史は表にまとまっていることが多いが、情報を定着させるために資料集などの特集ページを活用したい。教科書本文に記述されている思想家や著作については特に注意して覚えるようにしよう。文化史は、ある程度は独立した学習が必要になるが、政治史と関連づけられやすい事項については、著作や思想家がどの王朝のどの為政者と同時代のものであるかなどを整理する作業も、通史学習のアウトプットとして有効である。

【戦後史は冷戦構造と旧植民地の独立を整理する】 いずれの日程も戦後史の出題がみられる。21世紀の周辺地域についても問われているため、まずは戦後の東西対立の背景と勢力関係を整理した上で、東アジアや東南アジア、旧東側諸国などについて、国ごと、為政者ごとに出来事を整理しよう。現代史は、地域ごとの学習だけではなく、旧宗主国との関係や、戦争における利害関係国の状況とセットで学習することが求められる。例えば、中国現代史については、ソ連、朝鮮半島や日本の動きと関連づけて学ぶことが重要である。このような情報の整理には、資料集の現代史の単元に掲載されている複数の国の情報が一つにまとまった年表を有効活用してほしい。